

先輩医師に支えられ、緊張とやりがいのなかで 初期研修医、コロナ禍の一年を振り返る

新型コロナウイルス感染（以下、コロナ）が拡大するなか、医師として川崎協同病院に就職し、約1年にわたって研修を続けてきた4人の初期研修医。通常とは違った研修環境のなかでなにを学び、感じたのか。その思いを聞いてみました。

（聞き手は吉田 絵理子医師、医局事務 伊東 匠）

疾患ではなく、人を見て

伊東：この病院で働こうと思ったきっかけと実際に働いてみての印象は？

富永：民医連の病院を見学した時に、どの先生も教育熱心だという印象があったので、民医連の病院にしようと思いました。川崎協同病院に見学に来た時は、医局に和室があるのに衝撃を受けましたが（笑）、面接の結果ここでならやっていけると。働いてみるとどの先生もみななご自身の業務で手一杯なはずなのに、わからないことを教えてくださり安心しました。

鈴木：きっかけは、和田先生の医療に対する姿勢に感銘を受けたからです。医学部に合格したあとこの病院で開催されていた「合格お祝い会」に参加して和田先生に初めてお会いしました。

田中：僕もそこに参加していました。

鈴木：和田先生は患者さんを疾患という側面だけで捉えていないということが、大学生の私にはとても響きました。疾患だけに焦点をあてて診るのではなく人として診て家に帰るところまで支援する。そして病院にまた入院する必要のないような仕組みを作る姿勢がとてもいいなと思いました。働いてみての印象は、何を聞いても大丈夫な雰囲気がある。ローテートしていない科の先生にも、わからないことを質問しやすいです。また、地域性かもしれませんが、複数の問題を抱えた患者さんが非常に多いですが、それがいろいろな意味でやりがいにつながっています。



吉田 絵理子 医師

田中 利昌 研修医
順天堂大学医学部卒

富永 航平 研修医
琉球大学医学部卒

先輩の医師に思いを語る

コロナで制限された診療

吉田：働きだしたのがコロナの感染拡大と同時期だったので比較はできないだろうけど、今どういうことに変化を感じていて、そのなかでの医師としてどのようなやりがいを感じていますか？

田中：こういう小規模の病院ならではの、すぐに患者さんを診にいけるというよさが制限されているのは大変でした。人との繋がりが、あらゆるところで制限されているので、同期で食事にも行けずストレスマネジメントは大変だなと。

飯田：そもそも、学生から社会人となって住む場所も環境も変わっているところなので、思っていたよりもストレスフルでしたね。あとは人見知りなので、科が変わるごとに大変でした。

吉田：大きな病院だとローテート科が変わるごとに医師だけでなく、看護師などのすべてのスタッフが入れ替わるからもっと大変かもしれない

飯田：だから研修医って本当に大変だなんて思いました、コロナ禍とは関係なく。

一同：本当にそうだね！

医者も人だった

伊東：医師という仕事に対する印象で、学生時代と変わったところがありますか。

鈴木：人を助けるためにやっている行為であっても、少し間違えると反対の結果になってしまう怖さがあると感じます。

飯田：大学病院を回っていたとき、みんなすごく忙しくて淡々と仕事をこなしていたので、以前は、医者は心を殺してひたすらに働いているイメージがありました。

吉田：生き生きとしていた先輩はいなかった？

飯田：患者さんとはしっかりとコミュニケーションをとって、バリバリ働いているんですが、同僚の先生方とはコミュニケーションは希薄だったイメージがあります。コミュニケーションがそこまでなくても医者っていう職業は成り立つんだなって。一方で、この病院に来て、雑談するくらいの楽しさや緩さがあって意外と医者も人間だなんて思いました（笑）。あとはコロナのなかで看護師さんも医者も一個人として、働いている人として見ないといけないと改めて気づきました。

田中：とても怖い仕事だなという印象です。患者さんからは上手くいって当たり前と思われているし、ちょっとしたミスが大ごとになる可能性がある。それから自分は、患者さんのことが常に頭から離れない。良い悪いではなく、切り離せないタイプなんだと実感しました。

吉田：研修医一年目は慣れていない分、ずっと仕事が続いている感じがしてしまうかもしれない。

田中：一回だけ、仕事の事を完全に忘れたいと思ったことがありますが、受け持った以上は逃げるわけにはいけないと思いました。

病院外にも発信しないと

伊東：コロナ禍が患者さんに与える問題についてはどうですか？

田中：新型コロナウイルス感染症の患者さんだけでなく、入院患者みなさんが面会ができないというのはとても大変なことだと思っています。

富永：当院ではタブレット面会をしていますが、そのタブレット面会を終えた患者さんが泣いていたりする。面会できない、家族と会えないというのは大きな影響です。

飯田：コロナの影響で仕事がなくなったり、ストレスからアルコールの摂取量が増えたり、食事がすごく偏ったり、仕事がなくなったから家にこもりがちになってしまう。もともとあまり健康的な生活ではなかった人ほど、ますます不健康になり病気にも罹りやすくなってしまいます。

鈴木：健康診断で診察をしていて思うんですが、コロナが怖いから定期受診していないという人がすごく多い。服薬指導と定期的な診察が必要なのに中断している患者さんが何人もいます。私たちも病院内でコロナ感染を予防しているというだけでなく、市民にもこうしたことを伝えていかなければいけないなと思います。

吉田：そういうのを伝えるのが一つは外来の場合だし、医療生協新聞で情報を発信していくことも大切ですね。

田中：小児科で虐待が見つかる例がすごく減っていると聞きます。受診控えも理由としてあるでしょうけれど、社会とのつながりが少なくなったことで隠れてしまうのではないかと思います。虐待自体は増えているはずなのに発見される数が減っているのではないのでしょうか。

問われる責任と判断力

伊東：コロナ禍で、ほかの先生方の働き方を見てどう思いますか。

富永：救急でも発熱があるというだけでコロナを疑って感染防御をしっかりして診察をするので、それだけでも労力がとても増えています。そのなかでも患者さんに寄り添っている姿を見ると尊敬しかありません。

飯田：院内でもどんどん新しいルールができて、更新されていくなかで、私はそれを追いかけるだけで精一杯だったんですが、先生たちは分からないことはすぐに確かめて、常に安全に医療ができるように最善を尽くしている。見習いたいと思いました。

田中：病院や地域の医療の存続にかかわるような内容の判断を急に迫られたりするなかで患者さんの人権や医療の安全を守らなければいけないのは大変だと思う。

鈴木：休日体制などで医者が少ないときに一人の責任・判断で動くのですが、それを淡々とこなしているのはすごすぎる。

吉田：いまみなさんは、医師が一人で判断する大変さについて話をしてくれましたが、当院では以前から、みんなで話し合う文化を大事にしてきました。このことがこの時期に活かされていると感じています。また、コロナ禍のなかで組合員さんや地域の方から応援のメッセージをいただきとても励まされました。地域のなかで育ててきていただいた病院であるということを改めて感じました。



飯田 あかね 研修医
埼玉医科大学医学部卒

鈴木 花奈子 研修医
北里大学医学部卒

私が担当します！

ナイチンゲールの言葉を思い出し

2020年12月、副看護部長の職につきました。それまでは6年8ヵ月、川崎市高津区にある坂戸診療所で勤務していました。坂戸診療所は法人内で一番小さい診療所で、アットホームな雰囲気の職場です。私は緩和ケア認定看護師です。患者さんやご家族の苦痛が少しでも緩和できるよう、看護師への教育や、相談・支援を行っています。

コロナ禍では看護師はCOVID-19陽性患者と関わる時だけでなく、吸痰するときは飛沫の恐れがあるためPPE（個人用防護具）を着脱しています。着けるときは「急いで吸引しないと」と必死で着け、あとは吸引する、やれやれと思って丁寧に脱ぐ、また痰が絡む、吸引が必要で「急いで吸引しないと」と必死で着ける、吸引する、丁寧に脱ぐ…といった繰り返しです。

達成感を得る前に疲れてしまうこともある看護師たちをどのように支援していけばよいのか、どうしたら看護



川崎協同病院 副看護部長
鈴木 奈美

の楽しさややりがいを見出してもらえるか、を日々考えています。また、緩和ケアの知識やマネジメントの知識をいかして、少しでも川崎協同病院の看護師らが元気に過ごせるよう力を尽くしていきたいと考えています。

「天使とは、美しい花をまき散らす者ではなく、苦悩する者のために戦う者のことだ」とナイチンゲールは言いましたが、川崎協同病院の看護師にぴったりの言葉だと思っています。

トピックス TOPICS

ピンクのシャツに紺のパンツ 相談課の制服が一新 これまで通り温かい心で

患者サポートセンター相談課で働くソーシャルワーカーの制服が昨年変わりました。これまでは、川崎協同病院の事務職員の制服と同じでしたが、利用者にとっては事務職と区別した方がいいのでは、という意見があり一新しました。新しい制服は、ピンクのシャツと紺のパンツスタイルで、患者さんや関係機関の人から、わかりやすくなったと好評です。また、院内でも目立つようになりました。

相談課は、現在ソーシャルワーカー（社会福祉士）7人が業務にあたっています。病気やケガをすると、心配事や不安が色々出てきます。入院などがきっかけで、介護や入院費などの経済的な問題といったさま



相談課で働く7人のソーシャルワーカー

ざまな支援が必要になることがあります。

制服は変わりましたが、仕事はこれまで通り、院内の職員（医師・看護師・リハスタッフなど）や、行政、ケアマネジャーなど他の関係機関とも連携を取りながら、患者本人や家族と一緒に問題を解決する方法を考えていきます。

（課長 高橋 靖明）

利用しやすい"オープン検査"へ

患者サポートセンターで対応を一本化 希望者には送迎サービスも

川崎協同病院で利用できるオープン検査の申し込み方法が、このほど改善され利用しやすくなりました。オープン検査とは、かかりつけの医療機関ではできない検査を別の医療機関の検査機器を利用して行うもので、当院でも行なっています。当院で利用可能なオープン検査としては、MRI、CT、骨密度、超音波、内視鏡などがあります。

これまでの当院のオープン検査は、検査予約のみコールセンターで対応していましたが、申し込み方法がわかりにくく利用しにくいという声がありました。そこで、患者サポートセンターで予約から案内までを一本化して対応できるようにしました。

また、利用者は高齢者が多く、検査のためだけに遠くまで行くのは大変なので希望者には送迎サービスも行うことになりました。

申し込みから受診までの流れは下表のようになります。



オレンジの上着が目印 3人のドライバーが迎えにいきます

病院までは送迎付きで利用可能

かかりつけの医療機関からこのオープン検査のために当院まで来るのが大変だという利用者もいます。そうした人のため、当院では、自宅やかかりつけの医療機関まで迎えに行き、検査を受けた後に送り届けるという、送迎サービスをはじめました。

送迎範囲は川崎区内で、福祉車両なので車椅子なども対応可能です。この予約も患者サポートセンターで受け付けます。

① かかりつけの医療機関が患者サポートセンターへ電話で検査の予約を取ります。

TEL : 044-266-2119 受付時間 月～金 9:00～17:00 土 9:00～12:30

※送迎サービスを利用したい場合は、検査予約の時にかかりつけの医療機関の先生にお申し出ください。

検査予約ができる曜日・時間が限定されます。

※当日の検査にも対応しています。

② かかりつけの医療機関が所定の「診療情報提供書」を患者サポートセンターまでFAXします。

FAX : 044-266-1977

※検査予約票・診療情報提供書はホームページからダウンロードできます。

<https://www.kawasaki-kyodo.jp>

③ 検査を受ける人は、かかりつけの医療機関から「検査予約票」と「診療情報提供書」を受け取り、検査当日に「保険証」と一緒に持っていきます。

④ 検査結果は、依頼元のかかりつけ医療機関まで直接届けられるか、または郵送されます。

主な検査項目と費用の目安

検査項目	結果報告	読影レポート	費用目安(3割)
MRI(単純)	CD-R	あり	7,200円
CT(単純)	CD-R	あり	6,400円
骨密度(腰椎/股関節)	紙	—	2,000円
超音波(心臓)	CD-R	あり	3,500円
上部内視鏡	CD-R	あり	4,000～15,000円

